

Title	永原慶二編 日本経済史大系 2 中世
Sub Title	
Author	速水, 融
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1965
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.58, No.7 (1965. 7) ,p.689(89)- 690(90)
JaLC DOI	10.14991/001.19650701-0090
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19650701-0090

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

and Hague ed. The Theory of Capital, 1961.
 Kaldor, N. and J. A. Mirrlees, "A New Model of Economic Growth"
 Review of Economic Studies, June 1962.
 その批判については、
 Meade, J. E., A Neo-classical Theory of Economic Growth, 1961.
 Black, J., "The Technical Progress Function and the Production
 Function" Economics, May 1962.
 福岡正夫, "カルドフ氏の成長理論" 三田学会雑誌, 一九六二年八
 月。カルドフの思想の定式化に多少とも関連あるものとして、
 Arrow, K. J., "The Economic Implications of Learning by Doing"
 Review of Economic Studies, June 1962.
 技術進歩をも含めた成長理論のサーヴェイとしては、
 Hahn, F. H. and R. C. O. Matthews "The Theory of Economic
 Growth: A Survey" Economic Journal, Dec. 1964.
 ここであげた文献は勿論すべてではなく、一部である。念のため
 。

新刊紹介

野田 稔
 中村秀一郎 編

『経済政策入門』

最近、経済政策に関する著書が次々に刊行
 されていることについて、すでに本誌四月号
 の書評欄に述べておいたが、本書はそのあと
 刊行されたものである。

他の経済学の諸分野と同様に政策論もマル
 クス主義的な考え方と、厚生経済学的な見方
 とがあるのだが、本書は前者の立場から、原
 理論、国独資論、世界経済論、日本経済論と
 四大問題をとりあげている。従来、マルクス
 経済学の政策論は、過去の政策や具体的な個
 々の政策の階級性を述べることに終始するの
 が多いなかで、本書はまず野田教授が原理論
 を展開している。これは、従来のマル経政策
 論が歴史的な分析と同じになり易いのに対し、
 政策の論理的必然性を追求しているのが興味
 深い。とくに、清水教授とともに、厚生経済
 学的立場に福祉国家的立場を詳しく紹介し批
 判しているのは、その成否を問わず、従来の
 マル経政策論より前進していると考えられ
 る。

第一章「原理論」では、政策と理論、政策
 主体としての資本と国家、政策形成の必然

新刊紹介

性、資本主義政策の実践的あり方などが展開
 され、第二章「現代における経済政策論」で
 は、第一章の政策原理が、帝国主義段階・国
 独資段階でどのように展開されるかを、ケイ
 ンズ主義、ニューディール政策、福祉国家
 論、イギリス労働党の政策をとりあげ分析し
 て、これら政策の限界を示している。

第三章「世界経済と経済政策」は、共産圏
 の拡大と旧植民地の独立によって変貌した世
 界経済体制における政策、東西関係、南北問
 題を中心として、ドル防衛、BEC、コモコ
 ンなどを説明している。

第四章「日本経済と経済政策」は、復興と
 自立と成長と進んできた政策の特徴と、それ
 らの政策が、安定成長、重工業化・貿易拡
 大などの課題にいかなる効果と限界をもった
 かを検討している。

永原慶二編

『日本経済史大系 2 中世』

本書の構成は、序章 中世経済史総論、第

一章 荘園領主経済の構造(以上二編永原慶
 二氏)、第二章 農村の発達と領主経済の転
 換(網野善彦氏)、第三章 産業の分化と中世
 商業(佐々木銀弥氏)、第四章 室町幕府経済
 の構造(桑山浩然氏)、第五章 大名領国の経
 済構造(藤木久志氏)、第六章 中世海外貿易
 の性格(田中健夫氏)、の七編からなる。著者
 はいずれも中堅から若手の、学界の第一線で
 活躍する世代であり、現在の中世経済史の水
 準を示す著書としてここに取り上げた次第で
 ある。

全体を通じての論旨の統一については、特
 に明示はされていないが、やはり暗黙の内に
 も序章で示されている永原氏の見解が根柢と
 なっているように思われる。そこでは、ま
 ず、日本経済史における「中世」を、農奴制
 を基盤とする地域的封建領主制の展開期とし
 て、その前後の時代から区分する一方、中世
 前期に院政成立期と鎌倉末期、中世後期に南
 北朝内乱期と戦国末期とし、ついで、それぞ
 れの時期における農業生産と領主と農民関
 係、および経済の循環構造を明らかにされて
 いる。前期を特徴づけるものは、荘園制が経
 済社会の構造の基軸をなしていることであ
 り、荘園内部では、標準的農民としての名主
 の経営が基本であったが、それは低位の生産
 性と市場の欠如という条件の下では封建的な
 自給性を示さざるをえなかった。加えて荘園
 領主層の農業生産に対する無関心・無能力さ
 は、前後の時代に比べて特徴的で、生産力の

代、すなわち、古代および近世との連続（又は非連続）について、広い視野からの提言がなされて然るべきではなかつたらうか。（東京大学出版会・A5・三三三頁・九〇〇円）
—速水 融—

白石 孝 編
土屋六郎

『国際協力と日本経済』

本書の意味・内容は、非常に明確に、短いしがきに要約されている。すなわち、「わが国の高度成長は今やひとつの転期に達した。……また開放体制への移行は、きびしい国際環境をまえにして、わが国経済の体質改善を強く求めつつある。われわれの共通の関心も、まさにこうしたわが国の現状に対して、われわれの進むべき道とそこに横たわる諸問題を明らかにし、新しい今後のビジョンを確立するところにあるといえるであろう。」かかる課題を、本書では、日本と世界との接点の集約的表現である国際収支、貿易構造を中心に、理論的・実証的分析の双方から、しかも広い視野に立ってとらえ、十分なる解明を行ない、政策的方向づけを与えている。

まず、総論「世界経済の動向と日本経済の政策的課題」（赤松要教授で、わが国の国際的環境に目をむけ、長期的な世界経済の展開

る対策がみられるのである。

以上のように「中世」をとらえる基軸に沿って第一章以下の各論が展開されている。ここでは、特に個々に紹介することはできないが、第二章においては、中世の農村と農民経営の発展が生き生きとした表現によって描かれている。また第三章では、中世の商品流通を、農村史或いは荘園史の研究諸成果とからませつつ、その重層的・求心的・特権的性格が明らかにされている。従来、独立的に取り扱われがちであったこの分野の研究を正しい路線にのせようとする著者の意図を窺いえよう。第四章では、室町幕府経済という重要な問題に光をあてたものであるが、特にここでは「料所」＝幕府直轄領経営がとり上げられている。第五章では、中世と近世との橋渡しをなす戦国大名が対象となり、大名権力の収取体系、直轄領の存在形態、領域経済圏の構造、農民闘争、城下町の創設といった諸特徴が論じられている。第六章は、主として对中国大陸関係であるが、特に明帝国成立期の室町幕府を、国際関係という視野から論じた一節は興味深い問題を提示している。

総じて本書は、概説書・入門書ではなく、それぞれの専門家による高度の専門論文からなっており、読むに際してはそれなりの覚悟は必要である。ただ、経済史といっても、ここでは社会構成史的視角が貫かれている。一っだけ望むところがあるとすれば、前後の時

発展はきわめて緩慢であった。ただ、都市においては、荘園年貢の余剰が個別的に散在する市場を通じて流通したが、農民と市場との結びつきはなく、都市市場で取引される工芸品にしても、むしろ高級品が主で、その生産と消費の過程も、農村市場を媒介としていなかったのである。

他方、南北朝期以後の後期にあつては、名主経営が解体して、「百姓」層による小経営に生産の基軸が移り、荘園領主に代つて在地領主による地域的農民支配の農奴制が広汎に展開し、それによって荘園領主制や、それに密着する流通のメカニズムも変質・解体する。それに代つて、農業生産力の発展に支えられた地方における分業と交換の発展、さらにはそれに伴う貨幣流通の拡大がみられる。畿内を中心とした先進地と、後進地との経済的発展の地域差が明確になって来るものこの時期である。座商人を通じてであれ、中央地帯の農民は商品交換関係にまきこまれ、また、それに伴って地方経済の封鎖性は解体し始める。ただこの際、地方における商品流通の進展においては、中央地帯におけるそれと異なつて、市場と接触を持つようになる農民階層が限定されていたことは注意しなければならぬ。領主層もこの期には、前期とは異なつて領内の経済的発展に関心をもち、典型的には戦国大名にみられる如く、また、戦国大名を俟たずとも、在地領主層によって示される如く、農業生産の安定と農民保護に關す

とその論理が明らかにされ、その中で日本のとるべき方向・政策的課題が明示されている。とくにこの論文は、赤松要教授が最近刊行された名著『世界経済論』（国元書房）のエッセンスともいふべきもので注目に値し、一つの大きなベースタイプが与えられるのである。

第一部「国際収支の分析とその対策」では、わが国の国際収支の短期的循環および経済成長との関連が、実証的・理論的に分析されている。ここには三つの論文がかかげられているが、「景気変動、引締政策および国際収支」と題してとくに経済活動水準と国際流動性準備とのフィードバック・システムに重点を置いて実証分析を行なつた渡部福太郎教授の論文、「高度成長と国際収支」に關し、日本の高度成長が国際収支の大幅な赤字をもたらさなかつたのは何故かを、所得効果・価格効果・偏向成長効果から究明している土屋六郎教授の論文、「開放体制下における国際収支政策」を基本的・長期的に国内需給ギャップすなわち国内成長余力あるいは産出供給力の増強よりとらえ、モデル的・統計的に分析した海老沢道進氏の論文のいずれもが、興味ある注目さるべきものである。

第二部では、国際収支の構成項目のうちでも中心的な貿易収支がとりあげられ、「貿易構造の分析とその対策」が考察されている。まず白石孝教授が、世界および日本の貿易構造の変化、国際市場構造の変化を実証的に

解明し、わが国の輸出構造高度化の目標を明示される。ついで丸茂明則氏が、戦後におけるわが国の貿易構造の特徴＝中進国的貿易構造を明らかにするとともに、それからの脱皮がどのように行なわれつつあるか、それがわが国の輸出入の将来にどう影響するかを考察している。さらに藤井茂教授が、より本質的な意味において貿易政策をとらえ、「貿易構造政策の体系と課題」を、対内的、対外的貿易構造政策の二つの方向から、日本経済の発展を対象に、興味ある究明をなされている。

第三部「国際経済協力と日本経済」では、一部・二部での日本に着目しての考察から、視野をやや拡大し、世界の中での日本をとらえ長期的・本質の意味では、世界経済の調和的発展なくしては日本経済の発展もありえないことから、国際金融面（鈴木浩次氏）と国際貿易面（片山謙二教授）における国際経済協力が分析されており、とくにその中でわが国の地位と果すべき役割が追究されている。

さらに補論として、白石教授による「国際経済の動向とその理論」がつけ加えられている。国際経済学が古典派以来 Political Economy の伝統をもち、現実的諸問題に解答することを主要課題としてきたとすれば、十分なる現実的政策論議を行なうためにも、国際経済学の潮流、これ迄の展開の理解が必要とされよう。この意味で、この補論は不可欠のものであり、短かいものではあるが、すばらしい展望となつている。

最後に基本文献案内として、今後の研究のための文献紹介・解題がなされており、非常に便利である。

かように本書は、講座現代の経済政策の第四巻として、緊急かつ重要な問題を、非常にバランスのとれた構成、すぐれた執筆者をもつて、解明しつくしたものであり、転期に立つわが国経済の政策的課題にひとつの重要な指針を与えるものと思われ、かかる問題に関心あるすべての人々に一読をおすすめしたい。

日本経済の転換期論、開放体制、自由化への移行、国際協力の要請といった問題について、ただレットルだけにおどらされることなく、その本質の意味・内容を理解し、周到なる理論的、実証的分析にもとづき、今後の方向、とるべき施策が考慮されるべきであり、かかる反省に本書が役立つことを期待してやまない。（中央経済社・昭和四〇年五月刊・二四八頁・七三〇円）

—深海博明—